



お人選
教室とホールを、毎朝消毒済み沢山の玩具がこどもたちの登園を待っております。
そんな光景とあと一週間足らずで夏休みです。

夏の訪れですが、札幌では本当に短い夏です。幼稚園では毎年、園庭と屋上デッキで水あそびに夢中になるこどもたちの歓声がひびきわたります。今年はどうは行かないですが、こどもたち、他のあそびで汗を流しており、水筒が空っぽになる子ども！

■こどもたちの表情が出し、力みになるので「名人コンテスト」があります。

逆立ちして2・3歩あるければ「逆立ち名人」なのです。でも、こどもはこれで満足しません。

ここまで出来るようになるまで大変な苦勞をして来たのに、止めようとしません。

これ迄の苦勞の積み重ねは本だけではなく、周りのおとたちみんなが知っているのです。苦勞した様子を見味でいるし、見味した自分と同じように苦勞しているから、その苦勞が分かるのです。即ち、苦勞しているから、おとたちの苦勞が分かるのです。

不思議なこと、少くも出来るようになることと、やろうと「意欲」が生まれます。こんなことと集団が「自然発生的」なのです。

「こどもは環境で育つ！」と言う名言があります。こどもたち同志がお互いに認め合い、支え合う環境なのです。

そんな環境の中で、こどもたちは育ち合っているのです。



「名人コンテスト」は5メートルを越える距離をクリアすると「逆立ち名人」称号のGETなのです。

これは全園での開催で失敗して泣き崩れたり、くやし涙を堪える事幾度も経験しては挑戦してくるコンテストです。

クラスの応援がすごいのです。全員立ち上がるの、声援！失敗時の嘆き様！（しかし、成功時の時は本は勿論、クラス全体と大よろこびと大わらわら！）観ているスタッフ達、皆胸を熱くさせられます。今は密着してクラス単位での実践ですが、復帰の日を待ち望んでおります。

(心の育ちシリア) こどもの「種」と「根」を大切に！

「小学校では好きだったけど、中学校では好きではなかった教科は何ですか？」との問いに一番多かったのが「美術」だった。小学校では「図工」だったが、中学校では「美術」に変わった。その教科書には3歳の子と違えば興味や面白さを感じなくなりまいた。どうして？……それは図工の授業は子どもの創造力やイメージを育てる絶好の時間だったが、「上手い・下手」という基準で評価されるから下手な子に成りつひまらない時間になってしまった。

2歳の女の子がクレヨンで絵を描いた。紙いっぱい半円状の線が赤や黒や黄色で引かれていて、所々に強く押しつけたようなオレンジ色の臭がいくつかあった。そして手前には茶色で塗りつぶした楕円形の塊があった。女の子は「見て、見て」と持ってきた。ママは「上手に描けたね」と褒めた後「何の絵を描いたの？ 虹かな？ の丸い何かな？」。女の子は答えず別の遊びをはじめた。

大人は何を描いたかを知りたがる。絵とはそういうものだと思いつている。しかし、2歳児は何かを描こうと思って描いている訳ではない。赤いクレヨンを片手に持ち、紙に押しつけ、手前から右へ移動させたら、クレヨンと同じ赤色の線ができた。「面白い」と思って黒いクレヨンを使った。面白いから次々とやってみた。茶色のクレヨンを紙に押しつけ、ぐるぐる回わしたら楕円状の塊ができた。

「面白いものが出来た！」と思ってママに見せたら、「何を描いたの？」と言われた。2歳児は「ママ、そういうことじゃないの」と言いつけたが、その言葉を持ってなかった。

13歳の子と感じた上手い・下手というのは一体何なのか！ 教師が決めていいのだろうか？

ピカソの言葉「お父の子とてはアーティストだ！ 問題はどうすればアーティストのま大人になるかだ！」

「好奇心の種」や「探求心の根」をどう育てるのか！ いや！ 育てるよりも元々子どもが持つ「種」や「根」を摘まない事が大切で、子育てと教育の要諦である。